

資料をよむ

「立川流」に関する調査事業報告

古代・中世部会特定部会委員 櫛田良道・近藤祐介



はじめに－「立川流」調査について

「立川流」とは、真言立川流とも呼ばれ、辞書では、真言密教と陰陽道、民間信仰などが習合して出来上がった真言宗の一派と説明されています（『日本大百科全書（ニッポニカ）』『立川流』の項より一部抜粋）。しかしながら、「立川流」は中世段階で「邪教」とされ、^{しょうぎょう}聖教などの多くが破棄されたため、その実態は不明な部分が多く、また中世の立川地域（以下では立川市と表記）との関連も諸説が入り乱れています。

このような「立川流」ですが、昭和43年（1968）に刊行された『立川市史 上巻』（以下、旧『立川市史』と表記）には、わずかではありますが「立川流」に言及した部分があり、今回新たに編さんする『立川市史』においてもこの方針を継承することとなりました。

そこで平成28年（2016）10月より、櫛田良道・近藤祐介の2名が、立川市史編さん古代・中世部会の特定部会委員として、「立川流」に関する史料の調査、選定、通史編および資料編執筆などを行うこととなりました。



調査開始からコロナ禍まで

櫛田・近藤の両名は「立川流」研究の専門家という訳ではありませんが、櫛田は近世仏教史、真言宗史という立場から、近藤は中世寺院史、修験道史という立場から、それぞれ「立川流」調査を担当することとなりました。

調査はまず、①これまでの立川流に関する先行研究を参照し、現時点での「立川流」に関する研究の到達点を把握すること、②「立川流」に関する史料にどのようなものがあるのか、刊本として利用できるものか、未翻刻であるならばどこに所蔵されているのか、といった史料の情報を整理することから始めました。

その中で「立川流」に関する研究は、旧『立川市史』刊行当時よりも大きく進んでいることが分かり、立川流の祖とされる^{にんかん}仁寛の実像や、仁寛の法流を受け継ぐ「立川流」と「邪教」とされた“立川流的”なものを区別する必要があることなどが明らかになりました。そして「立川流」に関する史料については、諸本の史料翻刻はもとより、史料批判や史料内容の分析に踏み込んだ研究が進展しつつあることなども分かってきました。また、こうした調査を進める途中に開催された部会会議において、「立川流」については資料編とは別に報告書などの形でまとめる提案があり、この件についても合わせて検討することになりました。

そうしたなか、令和2年（2020）3月頃より、新型コロナウイルス感染症の急速な拡大という事態が発生しました。多くの社会的機能がストップし、さまざまな混乱と分断が生じたことは皆さまの記憶にも新しいことかと思えます。教育・研究機関も対応を余儀なくされ、大学では卒業式や始業式もないまま、オンライン授業を立ち上げて5月からスタートを切る事態となりました。

都内では数度にわたり緊急事態宣言が発令され、大学や研究機関、寺院への調査も制限・自粛を余儀なくされ、史料調査はもとより論文などの文献調査なども十分に行うことが出来なくなりました。そのため、調査予定を大幅に延期・変更することになりました。

その後、制限も緩和されてきた令和3年3月に調査を再開し、常楽院（東京都板橋区）での史料調査を実施しました。

常楽院での調査

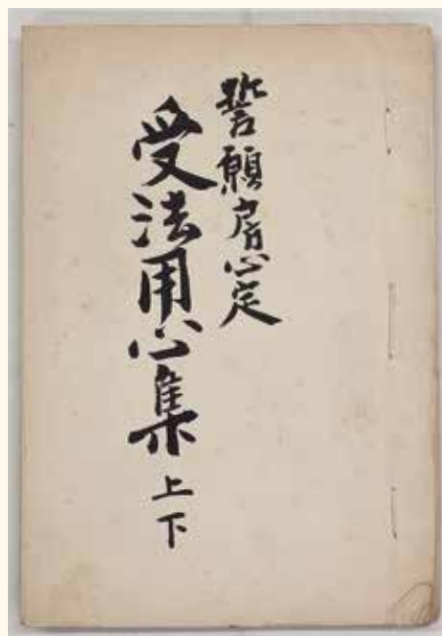
常楽院で史料調査を行った理由は、守山聖真氏（1888－1967）の研究が大きく関わっています。常楽院の住職であった守山氏は『立川邪教とその社会的背景の研究』（鹿野苑、昭和40年（1965））という本を執筆しており、これは「立川流」についての先駆的研究として評価されています。そして、この本の中で守山氏は立川流研究史料として『纂元面授』・『受法用心集』・『宝鏡鈔』・『立河聖教目録』・『許可秘伝鈔』・『秘密雑記偽経偽書目録』といった史料を翻刻し掲載されています。そこで、まずは守山氏が収集した史料を検討しようと考え、守山氏の史料が所蔵されている常楽院への調査を実施することにしました。現住職の守山大祐氏のご厚意により、所蔵されている史料の現状調査および写真撮影をすることができました（写真参照）。

しかしながら、常楽院で撮影した史料の整理や、「立川流」をめぐる最近の研究動向をまとめる中で、「立川流」と立川市との関係について大きな疑念が生じることとなりました。それはすなわち、「立川流」と立川市との間に、明確な関連性を見出せるのかという問題でした。

そこで、文末に「参考文献など」として掲げた論文・書籍、ホームページ情報の成果をもとに、「立川流」と立川市との関連について、少し整理をしてみたいと思います。



▲『纂元面授』（文保2年（1318））



▲『受法用心集』（文永9年（1272））



▲『立河聖教目録』（文中4年（1375））

「立川流」と立川に関連性はあるのか

「立川流」と立川市との関連について、もっとも有名なのは『宝鏡鈔』という史料の記述かと思われます。『宝鏡鈔』の当該部分には、「醍醐三宝院権僧正弟子〈僧正の舎弟〉に仁寛阿闍梨〈後に蓮念〉と云う人有り、罪科の子細有るに依り、伊豆国に流さる。彼の国において、渡世の為に、具妻の俗人、肉食の汚穢人等に真言を授け、弟子と為す。ここに武蔵国の立川と云う所に陰陽師有り。仁寛に対して真言を習い、学お所の陰陽法を引き入れ、邪正混乱、内外交雑し、立川流と称し、真言の一流を構う。これ邪法の濫觴なり。（中略）その宗義は、男女の陰陽の道を以って、即身成仏の秘術と為す。」という記述があります。これによれば、京都醍醐寺を源とする醍醐流の法流を受け継ぐ仁寛が罪科によって伊豆国に流罪となり、渡世の為に俗人らに真言を授法していたとされます。そし

て、そうした弟子の中に武蔵国立川の陰陽師がおり、仁寛に習った真言と陰陽道を取り込み、立川流と称した真言の一流を起こしたのが、邪法（「立川流」）の始まりで、その教義は男女の交わりをもって即身成仏の秘術とするものである、と述べられています。

この『宝鏡鈔』の記述が根拠となって、立川の陰陽師が密教と陰陽道を習合させ、「立川流」という「邪法」を創始したと言われるようになり、この言説が独り歩きし、巷間に流布していったのではないかと考えられます。

しかし、『宝鏡鈔』の記述にはいくつかの点で問題があることが指摘されています。第一に、『宝鏡鈔』の成立は永和元年・天授元年（1375）であり、仁寛が活動していた11世紀末～12世紀初頭からかなり時代を下った時点で書かれたものであり、その内容の信ぴょう性には疑問が持たれるという点です。第二に、『宝鏡鈔』は「立川流」を批判する立場から書かれたものであるため、その記述にはある種のバイアスがかかっていたであろうことが考えられます。第三に、「立川の陰陽師」なる存在について述べた史料は鎌倉時代には存在しておらず、『宝鏡鈔』の記述を裏付けることはできないという点です。

以上のことから、『宝鏡鈔』の記述は、立川市と「立川流」との関係を示す史料として扱うことは難しいと言わざるを得ません。

それでは、立川市と「立川流」との関係について物語る史料は他にどのようなものがあるのでしょうか。実のところ、「立川流」関係史料とされるものの中でも、実際に史料の中に「立川流」あるいは「立川」といった文言が登場すること自体が稀なようです。

そうしたなかで、櫛田良洪氏が書かれた『真言密教成立過程の研究』（山喜房佛書林、昭和39年（1964））という本の中に関連する記述がありました。それによると、金沢文庫に所蔵されている史料の中に、仁寛の血脈について記した劔阿（称名寺二代住持）直筆とされる史料があり、そこに「武蔵国立川蓮念」という記述があるそうです。ここで登場する蓮念については、他の史料から仁寛の伊豆での別名であると考えられます。しかし、残念ながら流人として伊豆にいた仁寛（蓮念）と立川との関係は、やはりはっきりとしません。

こうした事を踏まえて、「立川流」に関する論文を多く発表されている彌永信美氏は「立川流」という名称の由来について、武蔵国立川の地名だろうと思われるが、必ずしも明確ではない、と述べています。



結論と今後の展望

以上のことを総合して考え、現時点では立川市と「立川流」との関係性について、歴史的な裏付けは判然としない、という結論に至りました。

その後、この結論をもとに令和4年3月に、鎌倉佐保氏（立川市史編さん古代・中世部会長）、市史編さん室事務局、櫛田、近藤でオンライン会議を開き、立川流に関する報告書の刊行は見送ることを決定いたしました。

「立川流」が立川市とあまり関係がない、という結論には残念ながら方もいらっしゃるかもしれません。しかし、同時代史料からこの点を明確にできたことは、前進であったと考えています。とはいえ、平成28年から始まった調査を、これで終了とするわけにはいきません。通史編への執筆はもちろんのこと、調査成果を市民の皆さまに何らかの形で還元したいと考えております。そこで、事務局とも相談し、私たちが調査の過程で得た「立川流」に関する知見を、今後コラムのような形で随時紹介していく予定です。立川市史編さん事業における「立川流」について、ご理解とご期待をいただければ幸いです。

参考文献など

彌永信美「第六十一回智山教学大会講演 いわゆる「立川流」ならびに髑髏本尊儀礼をめぐる」『智山学報』67輯（2018年）。

櫛田良洪『真言密教成立過程の研究』（山喜房佛書林、1964年）。

柴田賢龍氏のホームページ（<https://badra20.jimdofree.com/>）。

守山聖真『立川邪教とその社会的背景の研究』（鹿野苑、1965年）。